

石を抱くエイリアン (4)



濱野京子

夏目尚吾・絵

〈前号のあらすじ〉

九月後半、偉生の提案から文化祭のクラス展示は「原発」になり、なんとなく集まる旧班メンバー。いつものゆるい雑談はいつしか原発談義に。おじが東海第二原発で働いている沙那の言い分は、ことごとく偉生につぶされる。はらはらする市子。ついに沙那は切れた。「姉さんなんて、大きらい!」……なんで、あたし?

わたしは直也の腕を引っ張って追いかけた。

「何で、おれが行く?」

あたしと一緒に走りながら、直也が問う。

「チャンスだろうが」

急に直也が立ち止まる。

「そんなんでもいいんか?」